

ドクター和のニッポン

年始めは、少しいつもと趣向

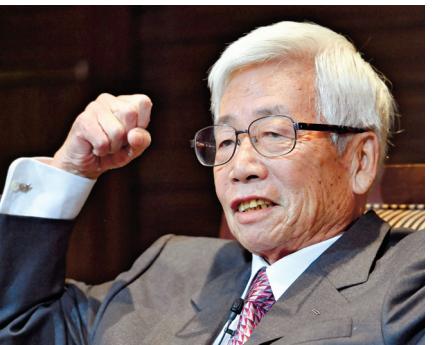


臨終回巻

う。年始めは、少しいつもと趣向を変えて生者を取り上げました。

安崎暁

⑯



安崎さんは、大学卒業後、1961年に同社に入社。1995年に社長に就任。バブル崩壊、建機不況の中で、中国での現地法人を設立するなど、いち早くグローバル化を推し進めて危機を乗り越えた敏腕経営者として知られます。

その安崎さんに胆のうがんが見つかったた

は、昨年10月のこと。すでに肺や肝臓などに転移しており、手術はできないと診断されました。

無駄な延命治療はやらないと決め、診断から1ヶ月後の11月には生前葬を行う旨を新聞広告を打っています。なんと迷いなき決断だったのでしょうか。

私は半年前はものすごく元気だったんですね。それと（今の健康）落差が大きすぎで、なんか、自分の人生の最終段階で説明責任を果たしていくのが、握手をして、ありがとうございましたと言えたことに非常に満足しています

。「延命治療を行わないといふのは、まったく私個人の考え方ですが、社長をやめて食堂になつてから、『日本尊厳死協会』に家内とともに入り、無理な延命治療をやらないといふことを願っていました。家の勧める食事療法はやっています。私は、がんとの平

長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

生前葬はしめやかではなく、実に明るく、にぎやかに行われたそうです。安崎さんの故郷・徳島の阿波踊りまで飛び出し、誰もが終始笑顔だったそうで、以下は、生前葬後の記者会見での言葉です。

私は半年前はものすごく元気だったんですね。それと（今の健康）落差が大きすぎで、とにかく、自分の人生の最終段階での説明責任——まさにこれが、「リビング・ウイル（生前遺言）」であり、延命治療を行わないことが、がんとの平和的共存。けだし卓見です。

男女の別れ、故郷との別れ、友との別れ、家族の別れ……人に別れは付き物ですが、大人ならば「ありがとう」で終わらせたい。

死んでからでは「ありがとう」が言えません。だから、悲しみよりも感謝が先に立つ生前葬に、私も大いに賛成です。

80歳の安崎さんに比べれば、私はまだまだひよっこですが、この夏、還暦を迎えるにあたり、生前葬を開く予定です。ぜひ私の葬儀に、安崎さんにお越しいただけたらと願つてやみません。

感謝伝える生前葬